

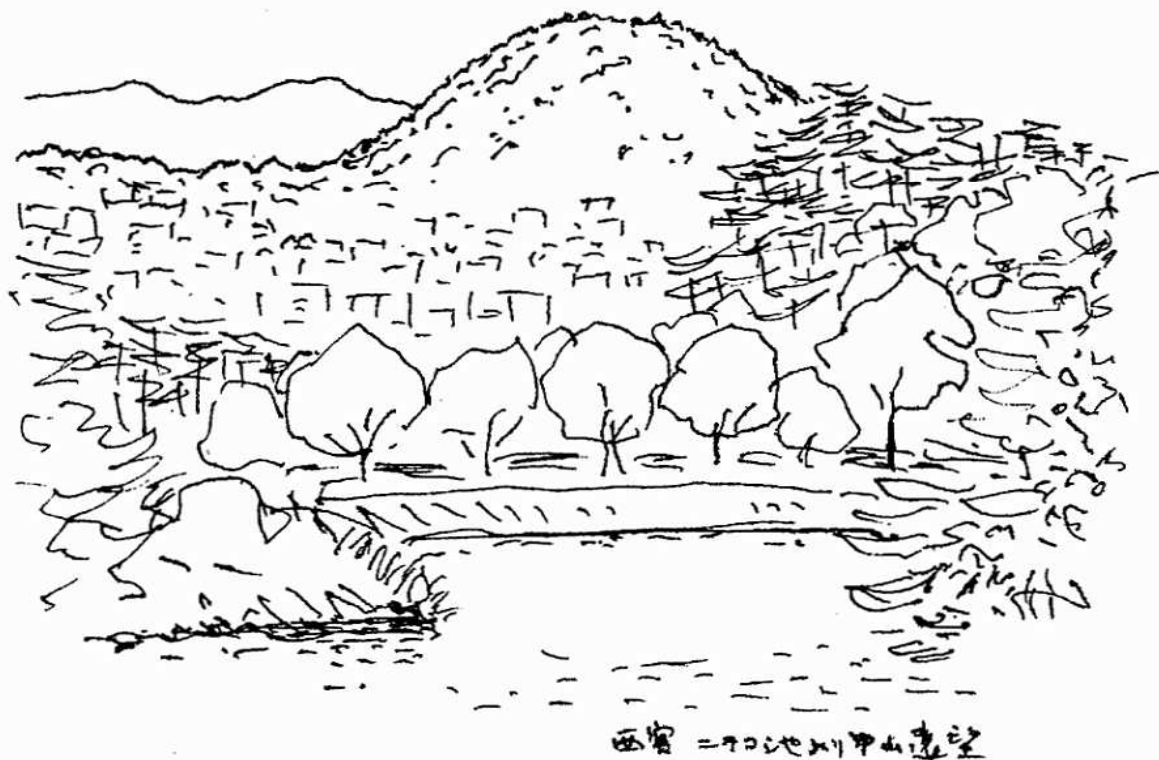
佐保会兵庫県支部だより

第7号

佐保会兵庫県支部事務局

神戸市東灘区西岡本6-9-18

☎ 658 ☎ 078 - 431 - 5004



林 利三郎氏画

私の奈良時代

浅野晶子 (昭23・家)

八月という月はいやでもあの頃の事を思い出させる。

あれから三十八年、物の洪水に埋没した繁栄の町のたたずまい、戦争を知らない若もの達ののびやかな肢体からは、あの耐乏の時代

のかけすら見出せないが、あの戦いの日々を経験した私たちには、今日という日も明日という日も、あの体験と切り離しては考えられないのである。

当時私は奈良女高師の二年生であつたが、一部留守部隊を除いてほとんどの女高師生は、学徒動員会によって舞鶴の海軍工廠へ配属されていた。工場での仕事は爆雷の発火装置の主要部分の掃り合わせ作業であつたが、工員さんによって人間関係は割合うまくいって来たように思う。

食へ物はご多分にもれずお粗末で、奈良の寄宿舎にいる時の雑草入りのお粥よりはましというものの、例えば朝はドングリ粕入りご飯と味噌汁、これを「山吹き汁」と名づけた。あの七重八重花は咲けども…の古歌をもじったもので、菜っ葉の切れ端も入っていない

いことも多かった。当然のことながら高揚した気持とは別に、全身倦怠・めまい等がおそい、女性特有の生理も乱れがちで、中には停止してしまつた人もいた。

それでもなお、目標達成のために自分達から申し出て、三時間残業、五時間残業という日が続いた。八月十四日の夜は徹夜の残業であつたが、ついに八月十五日を迎える。

八月二十一日、舞鶴へ上陸したソ連兵が婦女子に暴行を働くという噂を後に早々と帰校することになり、翌二十二日には出勤学徒帰還式と共に臨時休業式が行われ、懐かしのわが家に帰つた。

間もなく授業は再開されるが、耐乏生活は戦後の方が一段とひどく、食糧不足だけでなく、今思い出してもつらかつたのは、毎晩の停電であつた。

人はよく、青春の日よ、今ひとたび、というが、私達の世代の者が体験した青春の日々は、再び繰り返してはならない日々であり、子や孫にも二度と経験させてはならぬ日々である。

支部総会報告

昭和五十八年度支部総会が、五月二十九日午前十一時より三宮貿易センタービル二十四階の「パーク」において開催された。今年は好天気めぐまれ、客員・増田先生をお迎えし、会員七十五名出席、盛会裡に午後三時閉会。

総会次第

司会 小池典子(昭33・文)

一、開会のことば

副支部長 浅野晶子(昭23・家)

二、支部長あいさつ

津野貞子(昭8・家)

三、新入会員歓迎のことば

津野貞子(昭8・家)

四、新入会員挨拶(自己紹介)

五、議事 議長 津野貞子

④昭和五十七年度事業報告

支部報告 梶田迪子(昭33・家)

本部報告 村田祥子(昭31・家)

大学婦人協会報告

岡野明子(昭32・文)

②昭和五十七年度会計報告

内山美智子(昭20・理)

①昭和五十八年度会計監査報告

大路涼子(昭16・保)

③昭和五十八年度事業計画

津野貞子(昭8・家)

⑤昭和五十八年度予算案審議

内山美智子(昭20・理)

曾谷愛子(昭12・家)

⑥昭和五十八年度役員承認の件
委員長 上田ユクエ(昭4・文)

⑦「支部だより」編集委員紹介
「ことばを愛しむ」
講師 佐保会員(T6・国漢)
松山チヨ姉

七、会食
八、閉会のことば
副支部長 安達英子(昭18・文)

副支部長 安達英子(昭18・文)
議事終了後、松山チヨ姉の「ことばを愛しむ」と題してお話をうかがう。静かによどみなく語りかけて下さるお話から、ことばのあや、情緒について、奈良に思いをはせながら一時間余を堪能させて頂く。続いて会食に入り、先ず印部すゑこ先生(昭3・文)より、青少年の非行問題について、様々のご体験をとおして、家庭教育の重要性を強調された。また、本年度より実施された「婦人学級」について、津野支部長よりその経過、又会員の協力の実態等についての紹介があり、有能な多くの人材を擁する佐保会の存在の大きさを、改めて痛感する。お互いに応じた協力をする事によって、より広く社会参加の役割を果し得ることを期待したい。

昭和58年度役員一覧

支部役員	支 部 長	津野 貞子 (S8・家)	本部役員	理 事	津野 貞子 (S8・家) 村田 祥子 (S31・家食)
	副 支 部 長	安達 英子 (S18・文) 浅野 晶子 (S23・家)		評 議 員	佐藤すなほ (S18・理) 内山美智子 (S20・理) 森田 絹子 (S29・理数) 横山しづ子 (S31・文史)
	事 務 局	内山美智子 (S20・理) 竹田喜代子 (S22・臨数) 中村 京子 (S32・理物) 杉山 レイ (S33・文英)		佐保短大理事	八木 静子 (S9・文)
	会 計 監 査	大路 涼子 (S16・保) 飛鳥 光恵 (S29・家住)		大学婦人協会役員	木本 英子 (S23・家) 岡野 明子 (S32・文英)

昭和58年度地区リーダー一覧

地区名	氏 名	地区名	氏 名
神戸市東灘区	魚崎 茂子 (S10・理) 柳瀬あや子 (S42・文国)	芦屋市	橋爪よし子 (S9・理) 安達 英子 (S18・文)
神戸市灘区	津野 貞子 (S8・家) 山下 和子 (S39・理)	尼崎市	佐藤すなほ (S19・文) 中野 久子 (S29・理) 真淵 瑤子 (S33・文幼) 鈴木 久子 (S37・家)
神戸市中央区	横山しづ子 (S31・文)	宝塚市	藤田 美恵 (S32・理)
神戸市兵庫区	上田ユクエ (S4・文)	西宮市	谷沢 郁子 (S20・文) 吉田 俊子 (S22・文) 木本 英子 (S23・家)
神戸市北区	小田 清子 (S10・家)	姫路市(下記市郡を含む)	溝川美枝子 (S15・家) 山下 静香 (S22・家) 土井千鶴子 (S36・家)
神戸市長田区	郷 美美枝 (S8・理)	相生市	竹崎美佐保 (S18・文)
神戸市須磨区	近藤 房子 (S6・文) 八木 静子 (S9・文)	生穂市	
神戸市垂水区	曾谷 愛子 (S12・家) 竹田喜代子 (S22・臨数)	穂野市	
神戸市西区	田中 菊枝 (S9・理)	保崎市	
明石市	立石 睦子 (S9・家)	神三木市	
加古川市	茶谷万寿代 (S19・家)		
伊丹市	齊藤美智子 (S34・理) 松本加代子 (S44・文)		

佐保婦人学級

について

運営委員長

津野 貞子

(昭8・家)

四月四日の新聞紙上で、神戸市教委が婦人学級の開設を募っていることを知りました。前々から佐保会本部より、社団法人である私達の集団が、何か社会活動に参画することが、公の筋から望まれていると聞かされておりましたし、支部の活動を企画しなければと思っていた時期が、ちょうど募集の時期と一致し、早速市教委社会教育課へ、応募の要領などを伺いに参りました。

今年度のテーマは「国連婦人十年と私達」「高齢化社会を迎えて」のいずれかで、学級開設条件などを満たせば、市教委から運営費の補助・資料の提供や研修の案内など手助けをするということでした。私達は関係書類をいただき、早速企画委員会で検討し、「高齢化社会を迎えて」のテーマを選んで年間プランを計画、十九日に必要書類を提出しました。

この段階では、支部の活動として、教委の補助のあるなしに拘ら

ず婦人学級を開設することに意見一致、人材豊富な私達の集団の特徴を生かし、佐保会員のエキスパートを講師にお願いするというところで六月七日あわただしく発足する運びと致しましたところ、五月二十日付婦人学級の開設委託決定の通知が市教委から参りました。

委託決定により、教委の教育リーダー研修に参加が義務づけられていますので、リーダー二名を選出、同時に神戸市婦人学級連絡協議会や運営委員会にも加入致しました。それぞれの役員選出もあわただしいことでした。

しかし、この連絡協議会などに出席することにより、他の学級の方々との交流を通して、協調性・柔軟性を学びつつ活動をすすめることができ、新天地をみる思いがするとの喜びの声もきかれ、この学級開設の意義深さを味わっております。この学級のため今後共、皆様の御援助をお願い致します。

佐保婦人学級

に参加して

竹田 喜代子

(昭22・臨教)

準備期間も短く、PRもあまりできていないので開講式の人数が

心配でしたが、会員の方達の努力で五十名もの出席者があり、関係者一同感激してのスタートとなりました。

第一回目は「家庭における婦人の働きと位置づけ」と題して、印部すゑこ先生に広い視野と豊かな経験の上に立って、健全な青少年の育成、ひいてはこれからの社会が必要とする人間づくり(母として、妻として)等についてお話をうかがいました。

そして、このようなお話は、私たちだけでなくもっと若い方達にもぜひ聞いていただきたいと思いました。

二回目は、社会人としての婦人のかかえる諸問題を、管理職としての経験もお持ちの飛鳥光恵先生に、私た

佐保婦人学級 日程

高齢化社会を迎えて
下記の火曜日 午前10時～12時
神戸市勤労会館(国鉄三宮駅東南)

学習テーマ
日時
場所

月 日	学 習 項 目	講 師
6月7日	婦人学級について・自己紹介	社会教育課 高橋係長
6月14日	家庭における婦人の働きと位置づけ	印 部 すゑこ
6月21日	社会人としての婦人のかかえる諸問題	飛 鳥 光 恵
7月5日	文化の伝承・言葉を愛しむ	松 山 チヨ
7月12日	"	"
9月20日	福祉とボランティア活動	安 達 英 子
9月27日	人 権 問 題	浅 野 晶 子
10月11日	生 き ざ ま	北 川 秋 子
10月18日	"	"
10月25日	人権問題(映画)	浅 野 晶 子
11月8日	年相応の食生活と栄養	津 野 貞 子
11月15日	日々の献立への配慮	"
1月24日	社会への奉仕	浅 野 晶 子
1月31日	大阪ガス堺工場見学	
2月14日	嫁・姑・孫の問題	佐 藤 すなほ
2月21日	嫁・姑・孫の実際問題	大 路 涼 子
2月28日	閉講・学びたいこと・深めたいこと	

ちの中からも問題を引き出しながらお話をしていただきました。そして、講師ともどもこの問題の難しさを知ったのでした。

家庭におられる佐保会員の中心にさえも、この婦人学級にも参加し

かくい方がどれだけおられることか、国際婦人の十年の終わりに近づいた今もまだ解決には時間と努力のいる課題と思われました。

そして三回目、「文化の伝承」(次ページ四段目へ続く)

ことばを愛しむ

松山 ちよ (大8・国漢)

たこつばやはかなき夢を夏の月

と
夏くさやつはものどもが夢のあ

右、一は、芭蕉が「笈まがの小文こぶま」の長い旅をここの神戸の須磨に終えた折の句。一は、平泉で、笠うちしきて涙をおとしつつの句。

この千古の名吟は、東と西、遠く隔った所で詠まれたものでありますが、思えば、その各々の句がもつあわれが同じであること、而も前句には、勝者としての若い凛々しい義経が、後句にはその同じ義経の断末魔の孤影が彷彿するのであります。二つの句が見せている夢という文字もあわれ深うございますね。

(以下、申し上げますこと、いささか飛躍した考え方でございますがお聞き頂き度く)

千古に輝くこの二つの名吟に魅せられてか、いつか私は、わが住む日本という国を、夏くさやの東国と、たこつばやの西国とに分けて考えるようになりました。関東と関西、みちのくとかみ方とも呼

ぶようにもなりました。

そして、その両者の風俗習慣、

ことばの違いが、単に気候風土の違いからのみ生れたものではないと気づいたのであります。

みちのくは源氏剛直の息吹の辺土にまで滲み入っているところ、上方は武を忘れた平氏の優雅の漂



うところ、その各々におのずから生れたことばを考えてみたいと私はいつからかひとりひそかに考えるようになっていたのであります。

私はみちのくへの玄関口、那須野が原に生れました。日本語に、いとエの区別のあることなど知らずに育ちました。笑ちゃんはイミちゃん、井戸端はエドバタ、伊勢

まいりは、エセマエリでございました。順はジンであり、巡礼はジンレイ、ことさらに口をとがらしてジョンと発音することを煩わしいとさえ思ったことがございました。

母が奈良を訪れて初めて私にもらしたことは「こちらのことは絹こし豆腐、絹糸のようだね」でございました。木綿こし豆腐、木綿糸に自分のことばを喩えることが少々恥ずかしかったようでありました。

おもえば入学当初の大和めぐりの折、平城旧都趾の青草に佇たれた水木要太郎先生が、

「あこに見えるのが二上山、続くあこが金剛で葛城で……」と指さされるあこということばの何となくやさしくなめらかなであります。たことか。あこと指されるその山々も関東のそれに比べておだやかなたはずまいをみせて居りました。自分の郷里の男ならば、濁声をあげて、あっち、あすこと指さしてくるであろうにと、私はよにも快く先生のおこのひびきの快さに酔わされました。

私が「英語」と何の苦勞なしに発音できるようになったのは寮生活二年を経たころからでありましたらうか。

(前ページより続く)

と題し一言葉を愛(お)しむーという副題のもとに、松山チヨ先生にお話をうかがいました。もうすぐ卒寿を迎えられるとは思えないたしかさで、二時間近くの間ほとんど椅子にもおすわりにならないで、板書をまじえてのご講義でした。

大正六年、愈々、卒業の日も近づいたころ、担任の春日政治先生は、その言語学の時間の終りに「栃木県というところには、古いことばがたくさん埋れている……」と、さりげなく仰って下さいました。

この御一言が、どんなに私の心をゆさぶって下さいましたことか。恩師のお餞のことばを胸にしめて、その春四月私は、母校宇都宮高女へ、いそいそと赴任いたしました。そこには、かつての自分と同じような方言丸出しの多くの、身も心も健かな少女たちが、眼を輝かして私を迎えてくれて居りました。

ふるさとはい。方言を誰に憚ることなく語りかわせる故里はよい。方言を生んだ故里の山河はよい。私は涙の出る思いで、その方言、その東国のことばの前に立ち向おうと思いきめました。

た。

美しく老いるとはきつとこのようなことをいうのでしょうか。以下別表(前ページ)のような要領で本年度は実施する予定です。

年間テーマは「高齢化社会を迎えて」ですが、これは高齢者だけの問題ではなく、十年後、二十年後に高齢者の仲間入りをする人達の問題でもあるのです。老後の第一の問題は女性問題であるといわれています。迷いのない、心豊かな老後を迎えるために、今から種々の問題に取り組み、これを整理し、解決の糸ぐちを見つけていかなければなりません。理解しあえる同性にとつて研さんしあい、自己の周辺をより豊かなものに、仲間づくりの輪を広げていきたいと思っております。

現在学級生は六十名ですが、出席者は毎回四十名ほどです。その回だけの聴講もできますので、一人でも多くの方のご参加をお待ちしております。会場は、交通の便もよく、駅から歩いて二、三分の距離です。来年度も続行する予定です。おさそいあわせ御参加下さい。

下さい。

御紹介

茶谷萬壽代
(昭19・家)

先輩の丁子がつみ姉は、くるみやの社長としてご多忙のうちにも、ご趣味として茶の湯に親しんでおられます。私は、ある日

素顔紹介

Kurumiya

丁子がつみ 姉 (昭16・家)

「お茶のつどい」に、はじめてお仲間入りさせていただきました。
「くるみや」の明石本店四階に、お茶室がございました。

その日のお床の掛け物は「清閑一日福」お花は、矢はずすすき、

三白草、ききょう、三時草、藤うつぎ、紅ばな、なでしこなど、ときの花七種が籠に涼しげに活けられておりました。

夏茶碗で一服いただきました。

そのお抹茶のおいしかったこと、日頃のハードスケジュールをこなしながら、このような優雅静寂のひとときをたのしまれるご様子を目のあたりに拝見し、感服せずにはおられませんでした。

さらに絵画・陶器・仏像にも造詣深くいらっしゃるようでございます。

ご生活の一端をご紹介させていただきます。



「お茶のつどい」

左端が丁子がつみ姉

私のあゆみ

丁子がつみ
(昭16・家)

大正デモクラシーの中に騎蕩として漂っていたロマンティズムの空気を吸って少女となった私：女高師卒業の頃にはちゃんと気持ちを整理して大人の世界に入っ てゆかなければなりませんのに、その夢の続きを戦争中もずっと温めてとうとう一九五七年にケーキを始めました。

どういう訳か大変にチーズやバターの好きな女の子に育ってしまった私の手に「おいしさ」とは何かを覚えさせてくれたのは母校の小澤先生の授業であり、私の夢を確かなものとして位置づけ育ててくれたのは鋭い批評精神の持ち主であった亡夫です。

夫の他界と同時にいろんな苦しみがどっと押し寄せましたがその一つひとつを受け止めてゆくうちに、耐えることのエネルギーによって点された灯が私のゆくてを示してくれましたのでひたすら孤独な道を踏みしめて十年が経ちました。そして子供のように産み出した店が明石・神戸・札幌に育っています。

丁子夜に招かれて

夏座敷先に出されし

床々片草の

羅の庵主涼し

赤い焼いれと

真心の地走

真心は海のほろり

はくみ様

気がついてみると遠くよりまた近ぢかと注がれる先輩友人がたの温かさがほのぼのと感じられ、そのぬくみに胸がふくらみ、もう一度ケーキをほんとうに愛すること
の出来る若者を育ててみたいとフ
アイトを燃やしはじめているこの
頃です。
一九八三年八月
洋菓子店くるみや経営

「私を真佐子さんに

して下さる」

福 島 由規子(昭2・家)

賢明短大の教師として働くようになって二十年になる。しかし、たずらに年月を重ねるばかりで、私は教師らしいことは何一つしてないと思う。多くの先輩諸姉、あるいは後輩の中に、真摯に教師でありつづける人たちの生き方を見聞きするにつけ、あの人に倣わなければと思いつつ、また月日が空しく過ぎてゆくと、いった具合である。そんな中で小さな体験をお話ししよう。

私が賢明短大に赴任した時に、丁度本学に家政科が発足した。従って私は家政科の一期生からずっとかかわって来たわけであるが、不思議に古い卒業生の名前(姓名)が記憶に残っている。久し振りに出会った卒業生に、姓名の姓の方は大抵結婚して変っているの、名前で、恒美さんとか節子さんと言くと、びっくりしながらも喜んでくれる。

「先生、私の名前まで覚えて下さっているんですか」と。

この夏私は、短大生四十六名を

連れてアメリカのカリフォルニア州に約一か月の研修旅行をした。出掛ける前にせめて引率する学生の名前(苗字)ぐらい覚えておかなければと思いつつ、五年前から学長並びに中高校長兼務という日々の仕事に追われて、学生との直接のかかわりが少なく、ごく数名の、しかも苗字だけをやって知る程度で出発の日が来てしまった。

この研修旅行で学生たちは、英語科はサラトガ市、家政科はサニヴェール市に四週間のホームステイをするのであるが、サンフランシスコ空港からバスで約五十分南下して目的地に着き、学生がホストファミリーと最初に出会うシーンを、また名前の大切さを思った。ホストファミリーは一時の家族である学生たちを、私が紹介するまでもなく、前もって送られた写真で知った顔を探して、「マサコ」とか「トモコ」とか、外国式に言えばファーストネームで親しく呼び、大きな腕の中に温かく抱擁する。学生たちは生まれた時

からずっと親に呼ばれてきた自分の名前を聞くと、どんなに自分がここで、大切に温かく迎えられているかを感じ、初対面までに抱いていた不安や、新しい家族との距離感がなくなると、自分の方から片言ながら、英語で一生けん命コミュニケーションをしようとはじめるのである。

その後毎日、コースセンターに学生たちが集まって行われる授業でも、センターの教師たちは、「ミッコ」「カオリ」などと呼ぶので、教師と学生との間の壁は殆ど感じられず、生き生きとした授業が続けられる。私も日本にいる時は普通「シスター福島」と呼ばれているが、こちらでは誰もが「シスターユキ」と言うので、日頃の役職から解放されて人間らしくなったような気がする。学生の苗字もろくに知らないで引率してきたことを内心恥じながら、私はこんな雰囲気の中で、いつの間にか学生たちを、「真佐子さん」、

「智子」とさんと名前で呼ぶようになっていった。

こんなある日、一学生が私に、「先生、日本に帰っても私を真佐子さんにして下さいね」と愛らしく言った。親から呼ばれた名前のかけがえのない重み、それがこの人を本当の人間にしているとしみじみ感じた。

数年前にゴダイゴが、ビューティフル・ネームという歌をうたったことを思い出す。「ひとりひとりの子供はビューティフル・ネームを持っていて」というような歌詞のリフレインがあつて、いい歌だと思った。名前が表わしている一人の人格、かけがえのない一人の人間、他の人ではなく、「この人」を指すビューティフル・ネームそれは名前が美しいというより、その人自身のかけがえのなさを表わして美しい。たとえその子が、いわゆる悪の道に走ろうと、多くの欠点欠陥があろうと、尊厳存在なのだ。どんな人間もないがしろにできないと、この歌を思い出して思う。

教師の出発点は生徒の名前を覚えることにあるとよく言われる。「先生、日本に帰っても私を真佐子さんにして下さいね」と言った学生という言葉が忘れられない。学生たち皆同じ思いであろう。この学生は親から呼ばれた名前が心から好きなのだろうし、同時に自己を出席簿の名列表に並んだ活字としてだけでなく、もっと一個の人格として下さいと訴えているのだろう。もしかしたら、私にもっと学生に親しめる学長でいて下さいと言っているのかも知れない。しかし私は今、学生の一割の名前も覚えられないのである。聖書の中に、「よい羊飼いは自分の羊の名前を知っている」という言葉がある。よき羊飼いは、指導者、教師に当てはめることができようが、私はよき教師の姿からは遠い。

こんなことを感じながら、九月の授業開始と共に、今までと同じように名列表で、「青木さん」、「岩井さん」と出席をとる私である。

編集担当者から、学長としての苦勞話などをとのことで原稿を依頼された。大したことはしていないが、苦勞話は持ち合わせていないが、役職柄、学生生徒との接触が少なく、殆ど名前を覚えぬうちに卒業証書を手渡す現状が悲しい。

「私を真佐子さんにして下さい」と言った学生という言葉が今も私の心に響いている。



WONTANA

明石魚の棚物語

立石 睦子

(昭9・家)

明石と言えば先ず鯛、そのおいしい鯛は魚の棚センター街にあると言ってもよいかと思えます。正しくはウオノタナと言うのですが、呼び易いようにウオノタナと言います。それをモンタナと聞いて、「何てすてきな名前なこと」

パーセントが食品関係の店です。十三軒の魚屋を初めとして、乾物、かまぼこ類、川魚、肉、八百屋、菓子、果物、漬物、料理屋、酒屋、その他薬品、雑貨、呉服、などの店があり、ここを歩けば日常生活にはこと足ります。



と勘違いした人がある程、良い名前です。

魚の棚は、国鉄明石駅から海側に出て、第二国道を渡ればすぐの所で、駅から三分か四分の便利な位置にあります。東西二二五米、幅八米の道をはさんで両側に合計百軒の店が並び、このうち約六五

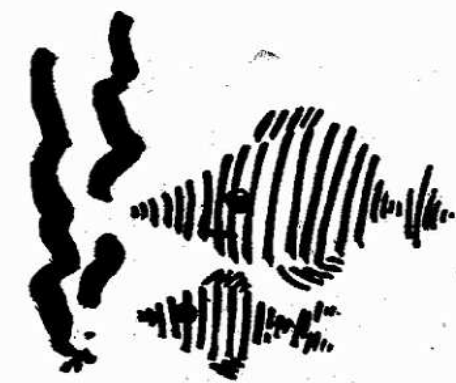
この目玉商品は鮮魚ですが、この通りには車が入らないし、両側を眺め廻しながら買物ができる楽しい町です。一日中人通りが多く、特に夕方には勇ましい掛声と共にざわめきがあり、活気に満ちた庶民的な場所です。明石の町の中心地に、こんな魚屋が並んでい

るのも明石の土地柄と言えましよう。

若い人は魚が嫌いと言いますがその人は本当の魚のおいしさを知らずに育った人だと思えます。また、魚は料理が面倒、第一まな板や庖丁もないし、臭いもいやという人のためには二枚或は三枚におろしたり、切身にして貰えます。

かつてゼミの学生を連れて姫路から初めてこの魚の棚へ来られた先生が、魚がびちびちとはねたりたが道の方まで逃げてゆくのを見て、学生と共にびっくりされました。ここで新鮮な魚を買い、その値段の高いのに二度びっくり。姫路まで持って帰る途中に、袋の中の魚がびくびく動くのでまたびっくり。大急ぎで煮たところが、鍋の中でびしゃびしゃとはね、煮上った魚は身と骨がばらばらになってしまったのです。これがとてもおもしろく、魚がこんなにおいしいものということを知ったというのでした。

ダイエーで、魚の売れないのは日本中で明石店だけということを知りました。生きている魚介類には魅力があるのです。浜から魚があがった時など、大きな魚がぶるんぶるんと動き、えびがびんびんはねたり誠に壮観で、私共もそれ



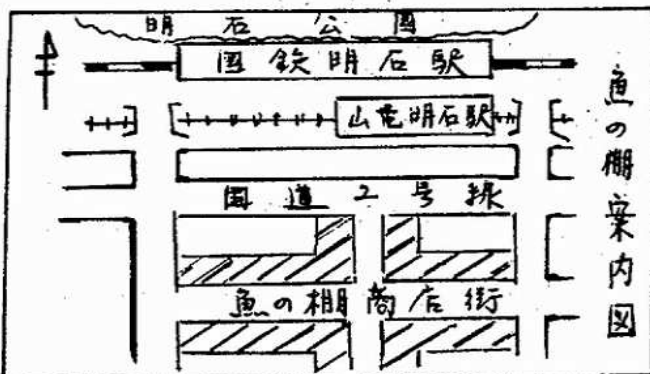
に合わせて体をゆすりたくなる程です。

しかし魚の棚の魚がすべて浜からの新鮮なものとは限りません。店によりみそ漬でも値段が違います。鯖のみそ漬一切が、三百円二百五十円、二百円と違っており味もまた異なります。よく吟味して求めないと、安いと喜ぶのは早計です。

あなごも名物の一つで東京へ送られるそうですが、炭火焼のおいしいのは、予約しないと無いという事です。浜でとれた六百円から千円くらいの小形の鯛は、塩焼きがおいしいのですが、毎日あるとは限りません。こんな穴場を探すのも面白いものです。

魚と共に野菜も新鮮で、バラ

魚の棚案内図



スのとれた栄養食事の献立を、品物を眺めながら考えます。これもなかなか楽しいものです。

昔は、石畳の凸凹した幅四米の狭い道でしたが、戦後現在のようになりました。かつて行政と商店と消費者との三者会談の時、鉄筋の堂々とした町にしないで、今のまま残してほしいという声がありました。初めての方は、びっくりされると思います。それだけに親しみがあり、庶民的な匂いをつばいにただよわせている街なのです。是非一度お越し下さいませ。喜んでご案内いたします。

たゆらぎの山

川口 汐子

(昭19・文)

十数年前「ああ、私はことし、ちょうど姫路へ来る以前の年数と、姫路に住んでからの年数とが同じになった」と思ったことがある。以後もこの町に住みつづけているのだから、生涯の過半の歲月を播磨に住むというわけになる。そうしたことが理由になって、この歌に魅かれたのではないけれど万葉集に「播磨娘」の作によると記されている次の二首がある

たゆらぎの山の尾上の桜花咲かむ春へは君し惚ばむ
君なくて何すとかせむ筐(くしげ)なる黄楊の小櫛もとらむとも思はず

播磨守石川君子が任果てて平城京へ帰るとき、在任中なれ親しんだ播磨娘がうたったものと記されていて、濃やかな心情が年代をこえて心にひびく。播磨風土記の編集にも関わったかとも想像される石川君子は、わけて別離の情も深いものがあつたらう。

住む窓から、はるかに、あるいは近々と、眺められるまろやかな丘のひとつであることに違いない。たゆらぎの山の桜花によせて、惜別の思いをうたった播磨娘子のうたを、新学期、さくら咲くころの女子学生に語ることが、いつか習慣のようになってしまう。この歌を味わうことによって、ふるさとをひと味ふかく愛するようになってほしい——こんなねがいをもち



葉学者たちは現在城のある姫山の古名とも、手柄山のこととも、あるいは葉師山とも推定してきた。そのいづれであるかは確証はないのだけれど、なんにしても、私の葉学若ものには現在城のある姫山の古名とも、手柄山のこととも、あるいは葉師山とも推定してきた。播磨びととなりつつあるというところのかしら、と思つてみたりする近年なのである。

川口 汐子

晩秋の伊豆の海へはあたたかいそぎくの花岩に群れ咲く
秋草の花の穂どもの枯らびつつ海面おしなへてひかる水鏡
海よりの風吹く坂に人はあてかたむける碑を見にこよと呼ぶ
語りつつ飽かざるわれら玻璃窓のあなたに海をくらく沈めて
あしもとに潮騒ちかき朝の径逢ひ難き人と逢ひ得てあゆむ

歌集「たゆらぎの山」

(昭和五十八年三月刊)より

婦人教育リーダー研修日程

回	月日	内 容
1	6月10日(金)	開講式 OAA事務局長 五十嵐恭子 婦人の人間関係
2	6月14日(火)	リーダーのあり方 内海 穰 市教委社会教育主事 糸井真須美 婦人学級連絡協議会長
3	6月28日(火)	人権学習をすすめるにあたって 秋山 克彦 市教委社会教育主事
4	7月12日(火)	文章の書き方 城本 敏 市教委社会教育主事
5	9月13日(火)	婦人の社会参加 住野 和子 神戸YMCA
6	9月27日(火)	婦人の意識と現状 加藤春恵子 関西学院大学教授
7	10月14日(金)	婦人と法律 徳矢 典子 弁護士 式修

リーダー研修を受けて

小池 典子(昭33・文)

「明日、婦人学級開設の説明会

がありますが出たいだけじゃないか」というお電話を内山様からい

ただき、なぜかお断りできない切

迫感を感じて、あたふたと教育会

館まで出かけて行ったのは五月二

十日だった。それまでに、婦人学

級のことを耳にはしていたものの

いずれ、ためになるお話が聞ける

のだからいにか思つていなかった

た。何事にも受動的な自分は、す

べて先輩がして下さるものと決め

ていた。代役で説明会に出席した

関係で、自動的にリーダー研修を

受けることになり、十月十四日修

了式を終えるまで計七回、内山様

と二人で婦人会館へ通った。

また、リーダー研修の一環とし

て行われたグリーンピア三木での

一泊研修には、内山様が参加され、

映写機操作実習の講習には私達二

人が出席し認定証をいただいた。

真剣に学ぶ老若百数十人の婦人

達に混じって、長い人生を真に生

きていくための諸問題について貴

重なお話を伺った。これらの研修

を通じて学んだことを、少しでも

生かしていければと思つている。

がんばってます……(新入会員)

時間の貴重さ

永田 宏子

(文・史)

縁あって出版社に勤務しはじめ既に五か月。マンションに一人暮らしで、お弁当を作って七時四十分過ぎには家を出る生活も、どうにか板についてきました。就職して、自分自身が特にどう変わったという意識はありませんが、私の中やまわりを通り過ぎていく、時間、というものが大幅に変わったのを感じます。

もちろん、学生であったあの頃も日々緊張して過していたはずなのですが、思い返せばなんと無為に生きていたことか。現在一日のうち八時間近くを拘束されるに至って、はじめてそのことを強烈に認識した次第です。

今では自分の自由になる時間はほんのわずかですが、少ない時間を有効に使って、これからも勉強することを心掛けていこうと思えます。

(日本実業出版(株)勤務)

教師になって

田中 千鶴

(家・食)

この春大学を卒業し、はや五月が過ぎました。私にとりまして青春時代の四年間を奈良で過ごせたこと、女子大で学べたこと、本当によかったと思っております。四月より教師として勤めておりますが、初めて社会へ出て、生活環

境も変わり、心細くなったり、様々なことで悩んだりすることもあります。そんな時、学生時代の楽しかったことを思い出し、「学生時代はよかったなあ」なんて情けないことを思っていました。五月の佐保会兵庫支部総会では、多くのすばらしい諸先輩方にお会いすることができ、どんなに心強く感じたことでしょうか。いろんな場で、先輩方のご活躍を見るにつけ、私も頑張らなければと励まされてる今日この頃です。

(県立尼崎高等学校勤務)

恭仁宮趾

松山 ちよ

(大6・国漢)

まぼろしの宮趾のあたり夏蘭けて遠代のままに稲は穂ばらむ

夏くさが素枯れをみする野づかさにバッタの群をさわがして佇つ

国分寺あとをめぐれるせせらぎにけふを鮮らしくつゆくさが咲く

瓶の原めぐる流れの漫々の水あかりに星の降るみゆ

のうぜんかづら真陽に燃え咲く街角を曲りて
恭仁のあとどころ去る



母校へ遅ればせながら愛をこめて

森田 鈴子

(文・史)

あれはまだ初夏の頃であった。支部の総会にこわい物知らずの軽い気持ちで出かけた私は、大先輩諸姉の集う様に圧倒され、正直なところ思わず引き返しそうになった。もちろん皆様には優しく迎えられる、穏やかな神戸港を眼下に素晴らしいひと時を過ごさせていただいた。

学生時代には、私は母校を愛していた訳ではない。むしろ、平穏な環境の中の少数数の女子大生活に、常に疑問を抱いていた。しかし、卒業し佐保会の仲間入りした今感じるのは、やはり奈良女の歴史の重さである。先輩方の御活躍を耳にする度に素直に我が事のように誇らしく、その末端に連なる者としての責任をも自覚する。

そしてキャンパスや先生方を懐しく思い出すのだが、その度に「奈良に行きたい病」に罹ってしまうのは、多少困りものなのである。

私の近況

金谷郁穂子(旧姓山下)

(家・被)

例年になく、今年は残暑がきびしいようですが、お元気で過ごしていらっしやいますか。

私は、今春、家政学部被服学科を卒業いたしました。この卒業を機に佐保会兵庫支部に入会できましたことを非常に喜んでおります。なにとぞよろしく願います。

さて、私の近況報告をさせていただきますと、現在は花王石ケンの本社にて勤務中です。年内には大阪支社の方に戻る予定です。と申しますのも、結婚のため大阪に戻らざるを得なくなりましたからなのです。私にとって今年は就職と結婚という人生の大事業が同時に訪れる、まさに激動の年であるように感じております。人生のターニングポイントにいる自分をひしひしと感じております。それでは、くれぐれもお体をお大事に。

(花王石鹸勤務)

佐保会をこんな風に

考えています

30代会員の

アンケートより

岩崎 雅美

(昭44・家)

若い人は佐保会のことをどう思っているのだろうか、という言葉がよく聞かれます。そこで今年の支部便りは、大学卒業生の中で丁度中間にあたる30代の人に、アンケートで佐保会を語ってもらいました。昭和41年から50年の間に卒業した県内の会員は、全部で167名です。回収は76名(46%)で、住所の変更がかなりありました。学部別の内訳は、文学部、理学部、家政学部共に、24/27名で同じ位でした。

一、職業について

現在教職にある人は35名(46%)、非常勤や家庭教師を含めると約半数の人が教職です。更に主婦でも過去に教職経験のある人を含めると、71%になります。やはり教育関係への就職が強いようです。

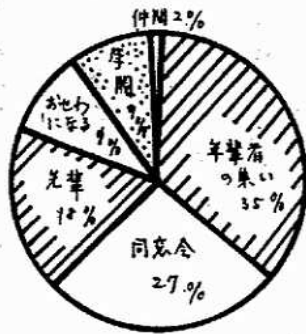
二、佐保会への集い

佐保会総会への参加者は4名、兵庫支部総会へは26名、(35%)各自の所属する市町村での集いへは25名でした。参加しない理由として、「忙しい」「遠い」「案内が来ない」「人との繋りがない」「行きにくい」「必要性・興味がない」等です。参加して良かった事は、「刺激された」「出会いが素晴しかった」「講演が良かった」等。概して遠くて忙しくても、出席すれば良かったという感想が返っています。

三、新聞について

『佐保会報』も『支部便り』もほぼ半数が興味深い記事のみ読み「よく読む」が次いでいます。やや『支部便り』の方がよく読まれています。『佐保会報』では母校の様子や、女高師の先輩の活躍ぶりがわかりなつかしい。反面、活字が小さく事務的、文章も固く、内容に

<佐保会のイメージ>



年令の隔りを感じる等々意見が多いです。『支部便り』は比較的身近に感じて、内容も新鮮で刺激されるようです。

四、佐保会のイメージ

佐保会、と聞くとどういうイメージを持つかという質問には、図のように35%の人が「先輩者の集い・先輩」と少し離れた形でとらえています。「同窓会・仲間」という意識は27%です。9%の人が「学閥」を感じています。

五、佐保会員であることをどう思っているか

「特に何も思わない」が32%で最も多い。しかし「女高師の方達と隔りがある」と「何か入りにくい」を合わせると、32%です。一方「誇り」に思う人が9%、「実力がなくて恥ずかしい」15%、「有難く思う」が14%あります。また「なじまない」「脱会したい位」が7%、総じて会員であることにやや後退した意識が感じられます。

六、佐保会員としてのメリット、デメリット

意見は少ないですが、メリットには就職のお世話、職場での御指導、地域での交流等があります。デメリットには過大評価される、思想的に世間の偏見を感じる、毎

年の会費がめんどう等です。

七、佐保会に望むこと

文化・社会活動、親睦、就職の斡旋等それぞれ同程度の希望が出ました。

八、東京の宿泊所

92%の人が泊ったことはないが、そういう場所の存在は知っており、泊る機会がない(68%)だけのようです。泊った人の最高は10日で、経済的にも、安全上からも多めに助かったと感謝しています。

九、佐保会以外のクラス会

科毎の集いの有無

クラス会を定期・不定期に行っている人は41%あり、その内毎年という人が6名あります。更に科単位で集いを持っている人は多く、名称にも科の雰囲気表われています。文学部、教育学科、道遥会、花梨の花、英文学科、英語英米文学会、社会学科、名称不明の幼教、あせび会、理学部、化学科、化学科同窓会、(雑誌会)クリスタル、物理学科、ニートン祭、生物学科、名称不明。家政学部、食物学科、和栄会、被服学科、織美会、住居学科、第生会。参加した人(約30%)は、同分野同士で話題も多く、年齢が離れていても楽しかったと述べています。

十、30代よりのメッセージ

今回の回答者の内、旧寮生活を送った人は3%、新寮は73%であり多くが寮生活を体験しています。しかし旧寮生活のような親密な人間関係は、寮の組織の変化と共に希薄になったと言えましよう。また女性に唯一開かれた高等教育への道が、女高師のみであった時代の卒業生と、どこかの大学でも選ぶことができ、たまたま奈良女に入学した戦後の人とは意識が異なるのは当然です。しかしこのような歴史を含んだ人の集まりは、家庭・職場のどこにでもあり複雑な人間関係を形成しています。大きな組織になれば味は薄くなり、小さければ親密で楽しいのは当然です。人の出会いはまさに運命であり、素晴しく有難く感じたり、不満や負担を感じたりします。先輩方の「すぐれたえらい」イメージから「ある女子大」への意識の転換、「家族的保護」から「あっさりした人間関係」を望みます。御協力下さった皆様、有難うございました。

おわび 松山ちよ姉の恭仁宮趾の四首目「めぐる」を「わくる」に、「水あかり」を「水のおかり」と訂正しおわび申し上げます。 編集委員

「お母さん、タダイマ!!」

高岡 美知子

(昭29・文)

「お母さん、タダイマ!!」とジョージョが勢いよく玄関の戸を開けて飛びこんで来た。「いらっしやい」と私は思わず言ってから「ア、お帰りッ」と言いなおすまのわるさ。ジョージョ29歳、フィリピンの銀行勤務のOL。去年の大晦日の午後のことである。

彼女は来日三度目。私が「青年の船」に乗った関係でわが家へ招待したことからおつき合いが始まり、今回は大阪府の奨学金を得て七か月コンピュータの研修に来たのを、お正月にはぜひお友達も連れて…と呼んだわけである。同行したホンさん26歳。マレーシアから洋裁の勉強に来たおとなしい女性である。中国系で二人共一生けんめい日本語と格闘している。

手づくりの料理で何の目新しさもないが、大晦日の夜はにぎやかだった。「聖女たちのララバイ」をジョージョがギター、中二の娘がピアノで弾いて、やんやの大演奏会となった。ジョーリーが大好きというジョージョは「紅白」に夢中。全部録音して持って帰るといふ。ワイワイガヤガヤ「紅白」

が終って一転「ゆく年くる年」の静ひつさが彼女らを驚かせた。こんな厳肅な気分を年越しは初めてだという。フィリピンでもマレーシアでも、クラッカーを鳴らし欣喜雀躍の大騒ぎだそう。著使いが下手で深夜の鐘までおそばを食べていたジョージョは「ついに二年間食べていた」ことになった。

元日のお祝いも例年のわが家のまま。私の作った、お世辞にも美味とは言えぬおせち料理を、一々いわれにうなずきながらつまんでくれた。

海神社へ初詣。神妙にお賽銭を投げ、着飾った子ども達の写真をとった。帰って二人に和服を着せた。タビが入らぬ、ぞうりがはけぬーまさに物干竿に着せつけるかの汗だくの作業であった。近所から借りたみこさんの緋袴もふしぎに二人に良く似合った。

「お父さん、お母さん、また来まあす」と娘達が帰って数日、漢字まじりの上手な日本語の礼状が来て私達を感動させた。

あれ以来、フィリピンと聞き、マレーシアと聞くと、私は耳をそばだて、思いを遠くはせる。今度は誰よりも早く「ジョージョ、お帰りッ」と迎えに出よう…。

お母さん、お母さん、また来まあす」と娘達が帰って数日、漢字まじりの上手な日本語の礼状が来て私達を感動させた。

支部事務局だより

内山 美智子

(昭20・理)

◇行事 (昭57・58・8)

- 本部会報 支部だより第6号 会計報告書発送(57・11・18)
- 新年会(支部だより編集反省会をかねて) (58・1・6)
- 出席36名
- 支部総会・議事、松山チヨ姉講演(58・5・29)於パーグ
- 出席75名(新卒者2名)
- 佐保婦人学級開講(58・6・7)於神戸勤労会館、出席51名
- 地区リーダー懇談会(58・8・30)於、神戸勤労会館

◇お慶び

- 山川はる江姉(昭19・保)兵庫県教育功労賞受賞(58・1・7)

◇睦会(60才以上の方々)(57・10・23)於六甲荘、出席34名

◇地区もより会

57・12・4	長田地区	7名
57・12・12	東灘地区	23名
58・1・30	尼崎地区	20名
58・4・6	西宮地区	10名
58・4・15	伊丹地区	8名
58・5・15	姫路地区	22名

△東灘地区もより会△

魚崎 茂子

(昭10・理)

昭和57年12月12日(日)六甲おろしが吹き荒れる寒い日でした。御影公会堂において、飯田先生はじめ二十一名が集まりました。松田節子姉(昭6・保)の美しい版画を拝見する。度々個展もなさっている由、何れも力作でした。

この度で二回目の集りでしたが、日頃お顔を合せていた方が会員であったり、又近くで集まりやすいということもあって、皆様大変よろこばれました。和氣藹々のうちに、来年を楽しみに閉会いたしました。

△協力お願い!!

戦後の混乱の中に小郷小福姉(大8・文)の創設された乳児院栄光園の改築募金

一口二、〇〇〇円(幾口でも)所、874別府市南荘園町3組ご送金は佐保会神戸支部事務局宛 尚現在、兵庫県支部総会、姫路支部もより会より二二三六一円の募金を頂いております。

△編集後記△

本年度の編集は、明石地区五名で担当しました。これまでの編集方針を参考にさせて頂き大いに助かりました。

この度は、先ず会員の中から広く人材をご紹介することとし、併せて将来佐保会を背負って頂く方達、今回は昭和四十年代に大学を卒業された方を対象に、佐保会員としての意識調査をさせて頂きました。尚、明石にちなむ記事もとりあげてみました。

不馴れな仕事でしたが、皆様のご協力を頂き、やっと発行の運びとなりほっとしております。その間多忙にまぎれ、心なくも、ご無礼したこともあったかと思われますが、お見逃し頂きたいと思っております。

表紙は、毎号お願いしております林利三郎画伯のご好意によるものです。厚くお礼申し上げます。

編集委員

- 立石 睦子 曾谷 愛子 茶谷万寿代 高岡美知子 岩崎 雅美

津留 宏(客員)	(57・10・13)
戸沢 美代(T15・保)	(58・2・3)
山崎 倫子(昭8・理)	(58・4・4)